



複合動詞「～オウル」の通時的変遷

池田, 來未

(Citation)

國文論叢, 63:1*-15*

(Issue Date)

2026-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505539>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505539>



複合動詞「～オウル」の通時的変遷

池 田 來 未

1. はじめに

現代語では動作の〈終了〉を表す形式として、前項に動詞連用形、後項に「オウル」がくる複合動詞（以下、「～オウル」）が用いられる。

- (1) 本を読み終わった。(作例)
- (2) 問題を解き終わった。(作例)
- (3) *音が消え終わった。(作例)

上記の(1)は「(本を)読む」という動作を意志的に行い、それを継続した後完了したことを表す。(2)は問題を解くという動作を終えたことを表す。一方で、現代語では、(3)「消え終わる」のように非意志的な変化を表す語は前項にきにくい。

このように、現代語の「～オウル」は基本的に他動詞を前項にとり、意志を持ってその動作を行った後、終了することを表すと考えられる¹⁾。

しかし、「～オウル」は明治期頃まで、自動詞を前項にとる用例も見られた。

- (4) 折角苦心したる種々の仕掛も誠に兒戲同様のものとなり了り、積年の經營も、日清戦争にて全く煙散霧消したるものなり。(60M 太陽 1909_14009, 53440)

(4)は「なる」という自動詞を前項にとり、「折角苦心したる種々の仕掛」が「兒戲同様のもの」になったという、非意志的な変化が生じたことを表している。

本稿では「～オウル」の上代から近代の用例をもとに、各時代で「～オウル」の前項にどのような動詞がきているのか調査を行う。そのうえで、「～オウル」が意志的な動作の終了を表すようになった時期とその要因を明らかにする。また、「～ハツ」等他形式との比較も行う。

調査の結果、「～オウル」は初期には変化の終了を表す例もあるが、しだいに動作の完結を表すものが主流になっていったことが分かった。そして、「～オウル」のこのような意味変化には、複合動詞「～ハツ」との分担が影響しているのではないかと考える。

本稿では、第1章で本稿の立場を明らかにしたうえで、第2章で先行研究とその問題点を指摘し、第3章で調査資料・調査方法を示し、第4章で調査結果を示す。第5章で前項動詞に着目しながら「～オウル」の意味特徴を明らかにし、第6章で「～ハツ」との比較を行い、第7章でまとめを行う。

2. 先行研究

「～オウル」の先行研究は、大きく現代語を対象としたものと、古代語を対象としたものに分けられる²⁾。まず、現代語に関する指摘から確認したい。

2.1 現代語「～オウル」に関する先行研究

現代語の複合動詞「～オウル」についてまとめた指摘のある先行研究として、日本語教育学会編（1982）、国廣ほか（1982）、寺村（1984）、張（1985）、加藤・福地（1989）、渡辺・陳（1991）、陳（1992）、山崎（1995）、宋（1998）、日本国語大辞典 第二版 編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2001）、池谷（2003）、廖（2005）、小俣（2008）、仁田（2009）、廖（2009）、玉城（2010）、韓・孫（2014）、黄（2015ab）、大野（2018）、時（2022）等が挙げられる。ここでは紙幅の都合上全ての先行研究を詳細に説明することはないが、本研究が特に参考にしたものを中心にいくつかの研究を紹介する。

日本語教育学会編（1982）は、「終わる」が継続動詞につくこと、その終了が予想されていることや人為的な制御が感じられることを指摘している。

また、国廣ほか（1982）は「オエル・オウルは〈予め与えられた限界〉について特に問題にしない」（p.83）、「〈予定の行為〉という特徴を持つ」（p.83）ことを指摘している。また、国廣ほか（1982）も前項動詞について言及しており、基本的に継続動詞につき、瞬間動詞にはつかないが（p.85）、「主体が複数で、行為の継続が考えられる場合には瞬間動詞と結合しうる」（p.85）と指摘している。この指摘は、後の玉城（2010）の「多回的」につながる指摘なのではないかと考えられる。

寺村（1984）は「三次的アスペクト」の一部として、「終了：～オウル、～オエル、～ヤム」（p.178）について言及している。寺村は、「いずれもある時間続いた事象が終了して、存在しなくなることを表わすが、大まかにいって、～オウル、～オエルは生きものの意志的な動作に、～ヤムは自然現象についていうのが典型的な用法」（p.178）という。ただ、寺村は「鳴りオウル」「開キオウル」の例を挙げ、～オウルが例外的に意志的動作以外にも使える場合があることも指摘している（p.178）。また寺村は、～オウルは意志的動作でも基本的に他動詞につくこと、目標を設定していることが多いことも指摘し（p.178）、「独立の動詞であるオウルとオエルの場合、自動・他動の釣り合った対立がくずれて、オウルが次第に自他両用に使えるようになってきているのと平行しているように見える」（p.178）とする。

森山（1983）は、最終的なアスペクトの意味は動詞だけの意味ではなく、〈出来事〉のレベル、つまり「アスペクトプロポジション」によって決定されると主張している（pp.1-2）。また、森山は一般化された動詞の意味特徴を「素性」と呼んでいる（p.4）。そして過程を前提とし、動きに終わりの点がある素性を「終結性」とし、その形式の1つとして「シ終ワル」を挙げ（p.12）、「終結性があるためには終結点がないわけではあるが、このことは、言葉を換えていえば、動きの全体量が決まっているということ

である」(p.12)という。

張(1985)は森山(1983)を引用しつつ日本語と中国語を対照して論じている。張は、「シオワル」と結びつく動詞は動作性を伴うということを指摘し(p.23), また, 「無意志動詞と瞬間的な動きを表す意志動詞は、『シオワル』と結びついて用いられる時, 動きの全体量規定が前提になっている」(p.24), 「継続的な動きを表す意志動詞は、『シオワル』と結びついて用いられる時, 動きの量が限定されている場合とそうでない場合とがある」(p.24)という。

陳(1992)は「『～おわる』はアスペクト的な意味『終了』を表す。前項動詞は他動詞かつ意志動詞が圧倒的に多いが, 文の中で, 『～おわる+と』『～おわった+N』などの形でよく使われていて, 意志的にその動作を終わらせるかどうかには無関心で, 動作の単なる終了を表すように思われる」(p.3)と指摘している³⁾。

山崎(1995)は, 陳(1992)を引きながらその指摘にあてはまらない例もあることに言及しつつも, 「陳(1992)の指摘するように, 前接動詞が意志動詞であっても, 『～終わる/終える』にはムードの意味が希薄で, 基本的にはその運動の過程の終了の局面を客観的に表し, 次の出来事(の始まり)と関連づける時間的な関係を示す機能が第一義的」(p.81)と指摘している。

仁田(2009)は, 「オワル形は, そのアスペクトの意味として, 動きが完成・終了すること, 完成・終了段階の動きを行うことを表す」(p.290)として, これを「〈終結相〉」と呼んでいる。さらに仁田は, 「オワル形を取りうる動詞は, 動きの完成点が予め定まっているといった特徴〈+完結性〉を持つ動詞である。この〈+完結性〉の有無は, 微妙で, 動詞がどんな名詞を取るか, 数量限定・限界限定が有るのかなどで変わってくる」(p.290)と指摘している。

黄(2015a)は「『～おわる, ～きる』が『非内的限界動詞』に後接し『終了限界達成性』を表わし, 『非内的限界動詞』の完成相が『開始限界達成性』を表わす」(p.204)と指摘している。

玉城(2010)は, 山崎(1995)を参考にしつつ「しおわる」の前項に意志性のある他動詞がきやすいことを指摘したうえで, 「『しおわる』『しおえる』の前項要素になるのは基本的に時間的な長さが必要な動作だが, 時間的な長さのない動作も多回的なものであれば『しおわる』の形式をとることができる」(p.3)としている。

先行研究を簡単にまとめると, 「～オワル」の前項には意志的な他動詞がきやすいとする説が多いことが分かる(寺村1984, 陳1992, 山崎1995, 玉城2010, 黄2015a等)。また, 時間的な長さが必要で, 継続可能であれば瞬間的な動詞とも接続しうるという指摘(国廣ほか1982, 玉城2010, 黄2015ab⁴⁾等)もあった。

2.2 古代語「～オワル」に関する先行研究

さらに, 「～オワル」を歴史的に調査した研究として, 大坪(1976), 藤井(1988), 岡野(1996), 成(2003)が挙げられる。いずれも「ハツ」と比較したうえで「～オワ

ル」について論じたものであり、大坪（1976）、岡野（1996）は文体の違いを中心に論じており、成（2003）は意味的な観点に着目しつつ分析を行っている。藤井（1988）は文体に言及しつつ、意味的な観点にも着目している。

大坪（1976）では、文体による違いに着目して本動詞「ヲハル」と「ハツ」の違いについて言及している。それによると、奈良時代には事物の終了を表す語としてヲハルとハツが併用されていたが、平安時代になるとヲハルが漢文訓読文、ハツが和文で用いられるようになり、院政時代に和漢混淆文が成立すると二語が再度併用されるようになったと指摘されている（p.7）。

「藤井（1988）は、ヲハルは、ある時点においてある事柄が終了したことを示す瞬間動詞で、漢文では多く他動詞の瞬間動詞について、その動作が完了したことを示」（p.43）し、今昔ではヲハリス、ヲハリテといった形がよく用いられること、ヲハリスの形では、完了を表す慣用形として他動詞・自動詞両方につくという（p.43）。

岡野（1996）は平安時代、鎌倉時代の本動詞及び複合動詞後項の「はつ」「をはる」について調査している。岡野によると、平安時代和文では動作・事柄の終了、最後まで行うことを表す際には「はつ」が用いられ、「をはる」は人の死や仏教行事を除いては用いられず、この違いは和文と漢文訓読文という文体の違いに応じたものであるとする（p.18）。また、岡野は中世王朝物語においては主に「はつ」が用いられているが（p.7）、「をはる」も用いられており用法がわずかに拡大していること、中世女流日記においても主に「はつ」が用いられるが、それ以前に比べ「をはる」が多く用いられるようになること（p.9）、「徒然草」では用例数が少なく「はつ」が見られるが「をはる」は用いられないことを指摘する（pp.11-12）。一方で、説話においては「はつ」と「をはる」がほぼ同数用いられ用法も接近しており、「をはる」を後項にとる複合動詞が多く用いられているという（p.14）。また軍記は説話と似た傾向を示すが、複合動詞「～をはる」の用例は僅少であるという（p.18）。

成（2003）は、「完全性・時間性の意味が混在していた『はつ』が『をはる』と意味分担をしていったのではないか」（p.54）という仮説を立てたうえで『源氏物語』『今昔物語集』を対象に「はつ」「をはる」の調査を行っている。成は「はつ」は前項に限界動詞がきやすく、また完全性の用法で使われやすいこと、『をはる』は前項に無限界動詞がきやすく、また時間性の用法が多いこと、さらに瞬間・変化動詞はほぼ「はつ」で読まれた完全性の用法であることを挙げ、この仮説の有用性を主張している（p.54）。

これらの歴史的な研究は、通時的調査を行う本稿も大いに参考にするところであるが、調査年代が限られているという問題点がある。

特に成（2003）の指摘に本稿も基本的には賛同するものの、成（2003）の調査資料は『源氏物語』『今昔物語集』に限られているため、本稿ではその後の「～オワル」の展開も調査したいと考えている。また成自身も指摘しているように⁵⁾、『今昔物語集』のよみを確定させるのが難しいという資料的な問題がある。成（2003）の仮説を裏付けるにしても、他の資料を含めた調査をすることが必要なのではないかと考える。

よって本稿では、より調査対象年代を拡大したうえで、「～オウル」の通時的な意味変化の過程を明らかにする。

本研究では上代から近代の資料を用いて、各時代の「～オウル」の前項にどのような語がくるのかに着目しつつ、「～オウル」の意味用法が歴史的にどう変化していったのか調査する。そのうえで、似た意味用法を持つ「～ハツ」との比較も行う。

3. 調査資料・調査方法

調査資料には、国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』（以下、CHJ）の奈良時代編、平安時代編、鎌倉時代編、室町時代編、江戸時代編、明治・大正編、和歌集編を用いる（国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2022.3, 中納言バージョン 2.6.1）<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>（2022年10月20日確認））。また調査に際し、検索ツール「中納言」の短単位検索を用いた。調査の際には、キーに「品詞－大分類－動詞 AND 活用形－大分類－連用形」、後方共起1（キーから1語）に「語彙素－終わる」を指定した。なお、「予輩は其窮竟の點まで論詰せむことを望む、」（太陽＜1895-12＞〔文學〕 p.49）のように、検索結果としてヒットしたものの、稿者が「～オウル」ではないと判断したものは調査対象から除外した。

4. 調査結果

時代ごとの「～オウル」の時代ごとの用例数は以下の【表1】の通りである⁶⁾。

【表1】時代ごと 「～オウル」 用例数

奈良時代	1
平安時代	6
鎌倉時代	18
室町時代	7
江戸時代	12
明治時代	395
大正時代	83
昭和時代	15

【表1】から分かるように、「～オウル」は少数ながら奈良時代から用例が見られ、数の多少は変化があるものの、昭和時代に至るまで使用されていることが分かる。

以下、「～オウル」の調査結果を時代ごとに示す⁷⁾。

4.1 上代

- (5) 進神嘗幣詞申畢次即申云【神嘗の幣を進る詞申し畢りて、次に即ち申して云はく】
（奈良・10-祝詞 0927_00023, 190）

上代は上の1例のみであるが、全てを「申し」たこと、つまり前項動詞で表される動作の〈終了〉を表す例であると考えられる。ただ、(3)は読みを特定することが難しいため、複合動詞の確例とはみなしがたい。

4.2 中古

中古には6例の用例が見られ、うち4例が訓点資料（「西大寺本金光明最勝王経平安初期点」）による用例であった。

- (6) 尔（の）時に四（は）（し）（ら）の佛是の語を説キ已（り）たまひて（、）忽然に現（し）たまは不なりヌ（。）（平安・20K 西金 0830_01002, 30000）⁸⁾
- (7) 尔（の）時に法師授記婆羅門、此の願フを聞、已（り）て、亦（た）伽他を以て（、）一切衆生喜見童子に答（へ）て曰はく、（平安・20K 西金 0830_01002, 55170）
- (8) おなしきみつとのしのくれのあきいさよひのころほひ、えらひをはりぬることになんありけるといへり（平安・20W 千載 1188_23024, 23070）
- (9) 満三七日已【三七日を満たし已らば】乗六牙白象、の心をよめる（平安・20W 千載 1188_23024, 23070）

(6) (7) は経に点をほどこして訓読した訓点資料「西大寺本金光明最勝王経平安初期点」の用例である。いずれもヲ格をとり「説く」「聞く」といった動作のある時点まで継続したのち、完了することを表す。

(8) (9) は「選ぶ」「満たす」という限界点のある動詞を前項にとる。ただ、この場合(8)は「選ぶ」という動作を複数繰返し、和歌集を完成させるという意味で用いられていると考えられる。つまり、「選ぶ」という動作を複数回繰返しという点で継続的に言い、ある時点で完結させるという点で、意味的には(6) (7)に近いものであると考えられる。

一方で(9)は「満たす」という変化を含意する動詞を前項にとり、「三七日」という限界点があり、それに到達したということを表す例であると考えられる。

(6) ～ (8) が動作の継続ののち、文脈や話者の意志によって決定される任意の時点で動作を完結させることを表すのに対し、(9)は前項「満たす」という動詞そのものが変化を含意するものである。

中古の「～オフル」はまだ用例が少ないものの、6例中5例（(8)に挙げた例は多回性⁹⁾解釈）が動作の継続ののちの完結を表していた。ただ、(9)のように変化が終了したことを表す例も存在した。

4.3 中世

中世は中古と同様に前項の継続可能な動作を終了する、という例も存在するものの、次のように変化の終了を表す例が多く見られた。(10)は「破る」のような他動詞、(11) (12)は「失せる」「絶える」という自動詞が前項にくる例である。

- (10) 義仲わづかに三千余騎をもつて、彼数万の兵を破りをはしぬ。（鎌倉・30-平家

1250_07010, 9950)

- (11) 法会の中間に、高座にしてたちまちに失せをはりぬ (鎌倉・30-宇治 1220_08005, 1800)
- (12) fayacayôta iqimo tayete, imaua coto qire vouatte miyetareba, izzucuuo faite vochitçucôtomo voboyeneba, 【早通うた息も絶えて、今は事切れ終わって見えたれば,】 (室町・40-天平 1592_04010, 24620)

(10) は他動詞につく例ではあるが、中古の (8) (9) とは異なり、前項動詞で表される動作を目的語として、それを終えた、とは解釈するのが難しいのではないと思われる。「破る」は他動詞ではあるものの、相手を「破る」と同時に自分が「勝つ」という主体の変化をもたらす語である。

さらに、中世には (11) (12) のように自動詞に「オウル」がつく例も見られた。これらも、前項の動詞自体が対象の変化を含意するものである。このように、前項の動作が「焼ける」「事切れる」のような非意志的な変化を表す語も中世には存在していることが分かる。

4.4 近世

近世以降は、「認める」「読む」といった継続可能な動詞を前項にとる例が増える。

- (13) 硯とりよせさら／＼と。認めおはりてお俊にわたし (江戸・53-人情 1833_06006, 34690)
- (14) せいげつ己が眉間に施し今月今日剃刀の刃に減し畢んぬ (江戸・51-近松 1707_14003, 9700)

近世の「～オウル」は「読む」「書く」といった継続可能な動詞に付き、前項の動作を終了させることを表す (13) のような例が多数を占めた。

(14) のように「減す」という変化を伴う語を前項にとる例も存在するものの、(13) のように動作の継続・完結を表す例のほうが多く見られた。

4.5 近代

- (15) 一定の限りまで読み終りて後ちに辨ずべし。(明治・60M 女雑 1894_28005, 3870)
(読む = $A \cdot 3$)
- (16) 戯語いよ／＼深くなり、つひに魂はおせみの懷へ入り終りぬ, (明治・60M 太陽 1895_01019, 73790) (入る = $A \cdot 2$)

近代に至っても (15) のように動作を意志的に終了する他動詞が前項にくる例が多く用いられる。しかし一方で、(16) のように位置変化を表す自動詞と共に起する「オウル」の例も見られた。

5. 「～オウル」とその前項動詞

「～オウル」の前項動詞について、工藤 (1995) をもとに分類すると、以下の【表2】

のようになる。

【表 2】時代ごと 前項動詞工藤分類

前項動詞 時代	内的限界動詞 (A・1) 主体動作・ 客体変化動詞	内的限界動詞 (A・2) 主体変化動詞	非内的限界動詞 (A・3) 主体動作動詞	非内的限界動詞 (B) 内的情態動詞	－ (C) 静態動詞	計
奈良時代	－	－	1 (100)	－	－	1
平安時代	1 (16.67)	1 (16.67)	4 (66.67)	－	－	6
鎌倉時代	5 (27.78)	4 (22.22)	8 (44.44)	1 (5.56)	－	18
室町時代	－	2 (28.57)	5 (71.43)	－	－	7
江戸時代	1 (8.33)	－	11 (91.67)	－	－	12
明治時代	64 (16.2)	80 (20.25)	247 (62.53)	3 (0.76)	1 (0)	395
大正時代	6 (7.23)	9 (10.84)	66 (79.52)	－	2 (0.02)	83
昭和時代	－	－	15 (100)	－	－	15

※該当する用例・項目が存在しない場合、「－」として示す。

※各時代の用例数に対する各用法の割合(%)を()の中に示す(小数点第2位を四捨五入した値。明治時代の「(C) 静態動詞」の値は0.0028…であるため、【表 2】では「0」となっている)。

【表 2】から、いずれの時代についても「～オワル」の前項に「(A・3) 主体動作動詞」がくる例が割合として最も多いことが分かる。ただ、割合が多くないながらも、前項に「(A・1) 主体動作・客体変化動詞」あるいは「(A・2) 主体変化動詞」がくる例も大正時代頃まで出現していることが分かる。

5.1 用法の分類

本稿では、以上のような前項動詞の違いが「～オワル」の意味用法に密接に関わっていると考える。以下、成(2003)、池田(2022)¹⁰⁾を参考にしつつ、工藤(1995)の動詞分類を用いて以下のように用法を分類する¹¹⁾。

〈状態成立〉：前項動詞で示された変化が終了しており、既に変化後の状態になっていることを表す。

前項に「(A・1) 主体動作・客体変化動詞」、「(A・2) 主体変化動詞」がくる。

〈動作完結〉：前項動詞で示された動作を継続したのち、完結することを表す。

前項に「(A・3) 主体動作動詞」がくる。

また、前項が工藤の(B)(C)にあたる例も少数ながら(鎌倉時代に1例、明治時代

に4例、大正時代に2例）存在した。それらの例については後ほど言及する。

5.2 先行研究との比較

工藤（1995）は「(A・1) 主体動作・客体変化動詞」, 「(A・2) 主体変化動詞」を「内的限界動詞」, 「(A・3) 主体動作動詞」, 「(B) 内的情態動詞」を「非内的限界動詞」としている（pp.73-76）¹²⁾。これは成（2003）の「限界動詞」「無限界動詞」と完全に一致するものではないものの、限界の有無に着目しているという点は共通していると考えられる。ここから、成（2003）の用法「完全性の用法」「時間性の用法」は本研究の〈状態成立〉〈動作完結〉に近いものなのではないかと考えられる。

そして、『源氏物語』『今昔物語集』を調査した成（2003）の「『はつ』は完全性の用法で、『をはる』は時間性の用法で多く使われる傾向がある」（p.54）と指摘していた。

本研究の調査では、鎌倉時代時点では〈状態成立〉9例、〈動作完結〉8例であり、この時点では〈動作完結〉、つまり成（2003）の「時間性の用法」が多いとは言い難い。成（2003）と本研究とのこのような結果の違いは扱った資料の差が関わると考えられる。

本研究では、読みの確定し難さと、藤井（1988）、成（2003）で既に詳述されていることから、『今昔物語集』を調査対象に含めていない。成（2003）の『今昔物語集』の値が反映されていないため、【表2】では〈動作完結〉があまり多くないのではないかと考えられる。ただ、続く室町時代では〈動作完結〉が約7割を占めるようになっており、〈動作完結〉の割合はその後も増加傾向にある。ここから、本研究では成（2003）の「はつ」が完全性、「をはる」が時間性の用法で用いられやすいという指摘（p.54）に概ね間違いないのではないかと考える¹³⁾。

5.3 前項に工藤（1995）の（B）（C）がくる例¹⁴⁾

なお、前項に（B）（C）がくる例も少数ながら存在した。

本研究の調査では、（B）が前項にきた例は「許す」「覚ゆ」「迷ふ」「忘却する」であった。これらはいずれも、心的な状態を表す例ではあるものの、「許す」前と後のように、動詞の前後に変化が生じることを表すものであり、意味的には〈状態成立〉に近いのではないかと考えられる。

なお、（C）が前項にくる例はいずれも「あり」が前接していた。これらはいずれも答辞や演説があり、それが終わって別の催しが開かれたということを表しており、「ある」「おわる」が連続しているものの、意味的には、演説あるいは答辞があり、それが終わって、と解釈すべき例である可能性がある。

5.4 「～オウル」が表す意味特徴

今回の通時的調査で、「～オウル」は動作の完結を表す用法が中世頃から増え始め、しだいにその傾向が顕著になっていくことが分かった。ただ、変化の終了を表す例も少数ではあるが中近世から用いられていた。

「オウル」は他動詞「オエル」に対応する有対自動詞であるが、中世頃の複合動詞「～オウル」では動作の意志的・非意志的を問わず、事態が終結したことを表していたのではないだろうか¹⁵⁾。(17)(18)はいずれも『宇治拾遺物語』の例である。

- (17) 僧を生ませ給はば、法務の大僧正を生ませ給へ」と言ひ終りて則ち死にぬ。(鎌倉・30-宇治 1220_04008, 5530)
- (18) その後なほ枯木にて立てりしが、この度平家の炎上に焼けをはりぬ。世の末ぞかしと口惜しかりけり。(鎌倉・30-宇治 1220_08005, 4090)

(17)は「言う」という意志的な動作が終わったことを表すと考えられ、(18)は「焼ける」という非意志的な変化が終わったことを表す。少なくともこの時点では、「～オウル」は継続する動作か、変化かを問わず、単に事態が終結したことを表していたのではないだろうか。

近世は今回調査した用例が少ないものの、自動詞とも解釈しうる「滅す」が前項にくる例が1例みられた(用例(14))。そして近代に至っても前項に自動詞をとる次のような例が見られた。

- (19) 然らば猥褻の文學を廣むるの器械となり畢らん、(明治・60M 国民 1888_25014, 6720)

(19)のような状態性をもつ述語に「オウル」が付く例は現代まで多くは用いられないが¹⁶⁾、明治時代には「ナリオウル」が44例見られた。つまり明治時代の(A・2)全80例の約半数をナリオウル形式が占めているのであり、少なくとも明治期には多く用いられる形式であったことが窺われる。しかし、その後現代にかけて、「～オウル」自体が動きの完結を表す用法として用いられるようになると、こういった用法はあまり使用されなくなっていったのではないかと考えられる。

ここから、「～オウル」は既に平安時代から、動作の完結だけではなく、変化が終了したことを表す例が用いられているが、相対的に動作の完結を表すことが多いことが分かる。そして、その傾向は【表2】から分かるように、概ね時代が下るにつれて顕著になっていくのではないかと考えられる。

6. 「～オウル」「～ハツ」の比較

以下に「～オウル」、「～ハツ」の近代の用例を挙げる。

- (20) 彼は十二月廿二日の朝夫れを読み終つたと云つて、(大正・60M 婦俱 1925_06029, 38820)
- (21) 今、日本皇室に對し奉り、慶祝の親電を、書き終つたところである。(昭和・60T 小読 1941_56B15, 2380)
- (22) 三人の中の二人が全身ぶぶ濡れになつて寒氣に弱り果てゝゐるのであつた。(大正・60M 太陽 1925_11084, 29810)
- (23) 毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、村の人たちは困りはて、おにに向かつて、一つの難題をもちだした。(昭和・60T 小読 1947_65C06, 6940)¹⁷⁾

(17)～(20)はいずれも近代の用例であるが、(17)(18)の「～オウル」が「読む」「書く」という動作の終了を表しているのに対し、(19)(20)の「～ハツ」は「弱る」「困る」といった状態が甚だしいことを表している。「～オウル」は近代では〈動作完結〉が主流になる。

成(2003)は「はつ」は完全性、「をはる」は時間性で多く使われる傾向がある(p.54)と指摘していた。

今回の調査結果では、「～オウル」は中近世頃から〈状態成立〉がしだいに少なくなり、〈動作完結〉が増加傾向にあることが分かった。ただ、池田(2022)で指摘したように、「～ハツ」の〈状態成立〉は長い時代用いられるが、近世以降は〈極限状態〉が増加し、〈動作完結〉はあまり用いられなくなる(p.18)。

つまり、「～オウル」「～ハツ」は〈状態成立〉〈動作完結〉という2用法に分化しただけでなく、「～ハツ」はさらに用法を展開させ、〈極限状態〉用法でも近世以降頻用されるようになり、それぞれの役割を分担するようになったと考えられる。

「～ハツ」の〈状態成立〉〈極限状態〉はいずれも「状態」を表し、「～オウル」は動作を表す。〈状態成立〉として頻用されていた時点で「～ハツ」に「状態」に着目するという性質があり、それが同じく「状態」を表す〈極限状態〉への派生を後押ししたとも考えられる。

7. まとめ

本研では、中世頃には「～オウル」は前項動詞の自他を問わず動作や変化の終結を表していたが、しだいに動作の完結を表す例が増えていくことを、通時的調査により明らかにした。

動作か変化かという意味で「～ハツ」「～オウル」が役割分担していたというのは成(2003)等先行研究でも指摘されていた部分ではある。ただ本研究の調査により、その役割が分化した時期は若干遅れる可能性があること、さらにその後の時代の調査により、「～オウル」が動作の完結、「～ハツ」が変化の終了を表すという傾向は、その後より強まっていくことが明らかになった。

今後の課題として、「オウル」に対応すると考えられる他動詞を後項にとる「～オエル」についても調査する必要がある。また、森山(1983)の「アスペクトプロポジション」(p.2)の検討や大坪(1976)、岡野(1996)といった先行研究で指摘されていた、文体による影響の精査も今度の課題である。

調査資料一覧

※引用に際し、表記を統一するため「、」を「,」に改めた箇所がある(引用参考文献についても同様)。

国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2022.3, 中納言バージョン 2.6.1)
<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/> (2022年10月20日確認)

注:

- 1) この点については、既に寺村 (1984) などにも言及がある。
- 2) なお、「ヲハル」について通時的かつ詳細な調査を行ったわけではないものの、「ヲハル」が漢文訓読語であるという指摘をしたより早いものに築島 (1963) がある。岡野 (1996) で指摘されているように、築島 (1963) の「第四章 漢文訓読語の語彙」(p.317) では、「二 訓点特有語彙の語性別分類」(p.325) の中の「(十一) 動詞」(p.336) の下位分類である「B. 源氏物語にも見えるが用法や用例に限られてあるもの。」(p.339) として「ヲハル (終) 一九二」(p.339) が挙げられている。

さらに、築島 (1963) は「セムといふ語は和文にも用ゐられるが、セマルは一般には見當らない。思ふに、セムといふ他動詞から、意識的にセマルといふ自動詞を作り出したものではなからうか。」(p.611) としたうえで、「この語と同種の造語法で、訓読のために作り出したのではないかと思はれる動詞」(p.611) として「ヲフ (終) →ヲハル」(p.611) を挙げている。

また、特定の資料にフォーカスして論じたものに藤井 (1988)、迫野 (2005) がある。

- 3) 渡辺・陳 (1991) でも「～おえる」「～おわる」が動作・行為が進行したのちの終了を表すこと、「～おえる (おわる) と～」 「～おえる (おわる) + N」のような形で使用されることについて言及されている (p.23)。
- 4) 張 (1985) は瞬間動詞が「シオウル」と結びつく場合には動きの全体量限定が前提になっていると指摘する (p.25) が、これは動作の継続と近いのではないかと考える。
- 5) 成 (2003) に、「仮説からすると、例文⑦のように、変化動詞が前項動詞になっているものは『をはる』ではなく『はつ』と読むべきではないかと思われる例もしばしば見受けられ、全体として再検討する必要もあるかと思われる」(p.54) とある。
- 6) 大坪 (1981) から、訓点資料に「～オウル」と見られる例が存在することが窺えるが、本稿では「3.1 調査資料・調査方法」に示した資料を対象としており、大坪 (1981) に示された訓点資料は調査対象に含めていない。また、『今昔物語集』の用例については、よみを確定し難いこと (池田 2022 の注 11 でも指摘している)、藤井 (1988)、成 (2003) といった先行研究で既に言及されていることから、今回は調査対象から除外した。なお、『今昔物語集』のハツ、オウルについては成 (2003) に詳しい。『今昔物語集』の分析は今後の課題としたい。

なお、統計的なデータには含めていないが、「史記抄」に「鑽中已又灼龜首言ハ鑽タル中ヲ先灼已テサテ」(岡見正雄・大塚光信編 (1971)『抄物資料集成 第一巻 史記抄』清文堂, p.588) という用例が存在し、「ヤキオワリテ」と読める可能性があることを付言しておく。

- 7) () の中に『日本語歴史コーパス』の時代、サンプル ID、開始位置を示す。また用例は、見やすさのため稿者が下線を付した部分がある。また、句点を「。」に統一するなど一部表記を改めた箇所がある。
- 8) () 等は CHJ 検索結果の「原文前文脈」「原文後文脈」に示されていたものである。(8)

以外の用例も基本的に CHJ の「原文前文脈」「原文キー」「原文後文脈」に従って示すが、(7)のように CHJ の「前文脈」「キー」「後文脈」に示された書き下しを【 】内に追加したものもある。

- 9) この用語は玉城 (2010) の「多回的」を参考にしている。
- 10) 池田 (2022) でも工藤 (1995) の動詞分類を参考にしている。
- 11) 以下、見やすさのため池田による用法分類を〈 〉で括って示す。また、本研究での「～オウル」の分類方法は前項に工藤 (1995) の (A・3) がくる例を〈動作完結〉とする等、池田 (2022) の「～ハツ」に共通する部分がある。ただ、今回扱った「～オウル」については、成 (2003) を参考に限界の有無に注目したこともあり、工藤の (A・1) (A・2) を前項にもつ例をいずれも〈状態成立〉と分類するなど、異なる部分もある。
また、用例 (8)「選ビオウル」のように、前項動詞が工藤 (1995) の (A・2) であっても、動作継続と解釈できるものは〈動作完結〉に近いと考えられる例も存在したことを付言しておく。
- 12) 工藤 (1995) は (A) (B) (C) をさらに細かく分けている (pp.73-78) が、ここでは深く追及しない。ただ、工藤の「(A) 外的運動動詞」は下位分類により限界性の有無が異なるため、(A・1) ～ (A・3) を区別した。なお、「(C) 静態動詞」は「時間のなかへの現象を問題にしない」(工藤 1995:70) ものであるので、限界性の有無については触れない。また、「(A・1) 主体動作・客体変化動詞」を「(A・1)」のように示すことがある。
- 13) なお現代でも主体変化動詞が前項にくる「～オウル」は用いられており、黄 (2015b) は「『～おわる』の前項動詞は継続動詞の主体動作動詞で他動詞が多く、継続動詞の主体変化動詞(無限界動詞)は通常『～おわる』形を使わないが、外部から限界を加えることで、『～おわる』が言えるようになる」(p.45) と指摘している。
- 14) 内的情態動詞が前項にくる現代語の「～オウル」については廖 (2005) に詳しい。廖 (2005) は、「思考動詞のうち、『考える』、『祈る』などの動詞は局面動詞と共起しやすいことから、『考える』、『祈る』は外的運動動詞に近い性質を持つ」(p.81) と指摘している。
- 15) 現代語の「～オウル」についても、陳 (1992) のように「～オウル」は意志的にその動詞を終了させるかどうかには無関心である (p.3) とする説もある。
- 16) 山崎 (1995) では「次の例のように変化動詞に『～終わる』が接続して、変化の完成の局面を取り立てる場合もある」(p.80) としてナリオウルの例 (用例 (4)) が挙げられていることから、ナリオウルは少数ながら現代でも用いられていることが窺える。
- 17) (22) (23) は国立国語研究所 (2020)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2020.3, 中納言バージョン 2.5.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2020 年 4 月 15 日確認) による。

引用参考文献一覧

- 池田來未 (2022)「複合動詞『～ハツ』の歴史の変遷」『国語国文』91(7), pp.1-21 (右開き pp.56-36)
- 池谷知子 (2003)「終了を表す複合動詞後項『～おわる』と『～おえる』について」『日本語・日本文化研究』13, pp.39-50
- 大坪併治 (1976)「ヲハルとハツ」『岡大国文論稿』4, pp.7-21
- 大坪併治 (1981)『平安時代における訓點語の文法』風間書房

- 大野公裕(2018)「第4の統語的複合動詞『終わる』——統語的複合動詞の分類再考」『メディア・コミュニケーション研究』71, pp.95-110
- 岡野幸夫(1996)「平安・鎌倉時代の和文における『はつ(果)』『をはる(終)』の意味用法——補助動詞的な複合動詞後項の意味用法の通時の研究のために——」『国文学攷』152, pp.1-19
- 岡見正雄・大塚光信編(1971)『抄物資料集成 第一巻 史記抄』清文堂出版
- 加藤泰彦・福地務(1989)『テンス・アスペクト・ムード』(外国人のための日本語例文・問題シリーズ15) 荒竹出版
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』(日本語研究叢書【第2期第7巻】) ひつじ書房
- 国廣哲彌・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子(1982)『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』(平凡社選書73) 平凡社
- 迫野虔徳(2005)「『おもろさうし』のラ行四段動詞『おわる』の成立」『語文研究』99, pp.1-11
- 玉城あゆみ(2010)「『終了』を表す複合的な動詞について」『琉球大学留学生センター紀要 留学生教育』7, pp.1-15
- 築島裕(1963)『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』東京大學出版會
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版
- 仁田義雄(2009)『日本語の文法カテゴリをめぐって』(仁田義雄日本語文法著作選 第1巻) ひつじ書房
- 日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』大修館書店, p.372「終わる」(姫野昌子担当部分)
- 日本国語大辞典 第二版 編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2001)『日本国語大辞典 第二版』第3巻, 小学館 p.74「おわ・る」
- 藤井俊博(1988)「今昔物語集の『畢』——ヲハル・ハツの表現と語法——」『國文學論叢』33, pp.26-44
- 森山卓郎(1983)「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢』17, pp.1-22
- 山崎恵(1995)「終了の局面を取り立てる局面動詞について」窪田富男教授退官記念論文集編集世話人編『日本語の研究と教育』(窪田富男教授退官記念論文集) 専門教育出版, pp.77-91
- 渡辺義夫・陳軍(1991)「動作性からアスペクト性へ——局面動詞の一考察——」『福島大学 教育学部論集 人文科学部門』50, pp.11-26
- 韓麗娟・孫沂汀(2014)「終了を表す『～おわる』『～きる』『～つくす』に関する意味用法」『比較日本文学研究』7, pp.48-64
- 黄軼男(2015a)「終結相複合動詞のアスペクトの意味——『～おわる』と『～きる』を中心に——」『語学教育研究論叢』32, pp.195-206
- 黄軼男(2015b)「局面動詞『～おわる』について」日本語文法研究会(代表:鈴木康之)編『連語論研究Ⅳ』(日本語文法研究会 研究会報告 第38号), pp.37-45
- 時衛国(2022)「“V+完”と“V+オフル”の対照研究」愛知教育大学『外国語研究』55, pp.189-204
- 成允廷(2003)「古代語の終了段階を表す複合動詞の後項要素についての考察——『源氏物語』の『はつ』、『今昔物語集』の『をはる』を中心に——」『國文』99, pp.43-55
- 宋協毅(1998)「『始・続・終』を表す類似補助動詞及び関連の補助動詞の研究: 日本語の『過程重視』の視点から」(名古屋大学博士論文) <https://dl.ndl.go.jp/pid/3137753/1/1> (2026年1

月 20 日閲覧)

- 張麗華(1985)「日本語の『シオワル』と中国語の『完』について」『語文』46, pp.22-32
- 陳軍(1992)「アスペクト的な意味『終了』を表す局面動詞の一群について」『言文』39, pp.1-12
- 廖紋淑(2005)「局面動詞『～始める』、『～続ける』、『～終わる / ～終える』と内的情態動詞との共起関係についての記述的研究」『ことばの科学 STUDIA LINGUISTICA』18, pp.63-87
- 廖紋淑(2009)「複合動詞『～終わる』、『～切る』、『～尽くす』の使い分けに関する覚え書き——日本語母語話者と日本語学習者の比較——」『言葉と文化 Issues in Language and Culture』10, pp.25-43

付記

本論文は、2022 年度お茶の水女子大学国語国文学会大会（2022 年 12 月 10 日）での口頭発表「複合動詞『～オワル』の歴史的変遷」及び稿者による博士学位論文をもとに加筆・修正したものである。

謝辞

この研究は、JSPS 科研費 JP20J14512, JP24K16081 の助成を受けたものです。

(いけだ くるみ／神戸大学)